

## 21世紀につながる建築・都市への感性とイメージ

## 1980年代から読み解く「モダンから逸脱する構想・美意識」の一要素「城郭様式」についての考察

Sensitivity to and images of architecture and cities for the 21<sup>st</sup> CenturyA discussion of the "castle style," an element of "conception and aesthetics that deviate from modernity,"  
as read from the 1980s

○西野晴香

\*Haruka Nishino

Abstract: Based on the above, it was found that the castle style can be an indicator of the differential elements that distinguish each architectural style. Furthermore, it is considered that the castle style is an indicator of the extent to which it can be transformed, omitted, or blended with elements of other architectural styles. The appearance of castles, palaces, and vehicles was found to play a role as a medium for conveying symbols that reinforce the location. In today's consumer society, where images are bought and sold rather than things themselves, it is recognized that a space with different kinds of false appearances scattered behind it can be an effective way to reevaluate a place for its theatricality and storytelling.

In addition, it was found that focusing on the objects in which semiotic devices such as the castle style are latent in the architecture and cities of the 21st century is an important way to accurately grasp Japanese society and cities, which have lost their substantive nature and have become image-driven.

## 1. はじめに

「モダンから逸脱する構想・美意識」について考察するうえで、1980年代に着目した理由は下記の2つである。

1つ目は、1980年代が「戦後の転換点」として位置づけられるからである。1980年代は、「ポストモダン」、「サブカルチャー」、「ニュー・アカデミズム」等といった旧来の戦後思想のひとつともなる「モダン」とは一線を画した時代であると認められる。つまり、文化や言論などの社会の担い手が、限られた知識人から広義の大衆に移り変わったという点で、1980年代を象徴するひとつのキーワードとして「感性」が挙げられる。

2つ目は、1980年代が21世紀の源流として捉えられるからである。具体的には、戦後77年である2022年から遡ると、1980年代はちょうどその折り返し地点に当たる。つまり、「戦後」や「近代」の転換点に生まれた構想・美意識は、現在に定着する「感性」に少なからず影響を与えていると認識できる。<sup>[1]</sup>

よって、1980年代に着目することは、20世紀以降に見られる建築への感性の変遷を研究する有効な手立てとして意義があると考えられる。

## 2. 城郭様式の誕生

まずはじめに、「モダンから逸脱する構想・美意識」の一要素である城郭様式が誕生した背景について述べる。具体的に契機となった出来事は4つあり、1958年の売春防止法の施行、1964年の東京オリンピック、

1971年のオイルショック、1972年の「目黒エンペラー (Figure.1)」のオープンが要因である。すなわち、城郭様式の誕生は、現在のいわゆる性産業隆盛が契機であると認識される。

また、城郭様式とは、西洋中世の城郭の暗示し、ヨーロッパの古城を連想させ、非日常的世界、異界（宗教上の理念や社会建設の提案を含むユートピアでもなく、商業化・矮小化されたもの）となる空間をもつ様式である<sup>[2]</sup>と、建築史家の片木篤は述べる。



Figure1. Meguro Emperor

## 3. まやかしの城

つぎに、城郭様式の外観について詳しく述べようと思う。特徴としては、ロマンスを連想させる仕掛けにすぎないため、本物の城や忠実な模写である必要がない点であると、片木は述べる<sup>[3]</sup>。すなわち、本物の「ような・みたいな」などといった偽物である

まやかしの存在である。また、模倣には、二つの型が存在すると片木は述べる<sup>[2]</sup>。一つ目は、本物と一部一体変わることなく引き写すものである。言い換えると、模写のことであると認識できる。二つ目は、ある対象の「らしさ」や「ような」ものを持つものである。すなわち、イメージを持つある差別的要素の集合であることが認識される。

具体的には、外観において、西洋中世の城郭の差別的要素 (Figure.1) としては、小塔、はね出し狭間、狭間胸壁が見受けられる。これらは、短形、円形、半円アーチ、先頭アーチの窓、屋根などといった要素とは異なり、いかに他の様式の要素が折衷されていても、その建物は、西洋の城の「ように」見えることが特徴である。

一方、日本の城郭の差別的要素 (Figure.2) としては、重量たる石垣、多層の大壁造、破風の組み合わせによる屋根の変化、いろいろな形を持つ窓・狭間の取り合わせが挙げられる。そして、日本の城郭の差別的要素も西洋の城郭の差別的要素と同様な特徴を持ち合わせる。よって、城郭様式において重要な要素は、上記で示した模倣の二つ目の型であり、イメージとは視覚後のうち、差別的要素だけが記憶されたものであることがわかった。



Figure2. Love hotel modeled after a Japanese castle



Figure3. Interior view of Meguro Emperor

#### 4. 室内における性格づけ

つぎに、内部空間 (Figure.3) について述べる。特徴として、各室にそれぞれに異なる性格 (中世大ホール「風」や宮殿「風」の部屋、神話や童話の世界に描かれる楽園、外国の土地、屋外、遠く隔たった時間、高級ブランドなど) が付与され、その性格に応じた異なる様式に付随して、装飾が舞台装置として機能していると片木は述べる<sup>[2]</sup>。

つまり、城郭様式の各部屋の機能は同じであり、性格づけは機能を下敷きとしたものではないと言える。言い換えると、すべての様式をカタログ化することで、「形態は機能に従う」といったモダンの教義を逸脱していることがわかった。

#### 5. まとめ

上記を踏まえ、城郭様式は、建築各様式を区分する差別的要素とは何かを示す一つの指標になり得るものであることがわかった。さらには、差別的要素を引用する際に、それをどこまで変形・省略、あるいは、他の様式の要素とどこまで折衷しうるかという指標の要素を孕んでいることが考察された。また、城・宮殿・乗り物などに見せかけた外観は、場所を補強するシンボルの伝達媒体としての役割を担っていることがわかった。そして、その背後に、それぞれの異なる見せかけの異界が散りばめられた空間は、物そのものではなく、イメージが売買される現在の消費社会において、舞台性や物語性の場を再評価する有効な一つの方法になり得ることが認められる。

加えて、21世紀につながる建築・都市について、城郭様式といった記号論的装置が潜在している対象に焦点を当てることは、実体性を失い、イメージが先行している日本の社会や都市を的確に把握するうえで重要な一つであることがわかった。

#### 6. 参考文献

[1] 斎藤美奈子,成田龍一 他:「1980年代」,河出書房新社, pp.7-13, 2016年.

[2] 片木篤:『建築文化』-各論 I まやかしの城ラブホテル論(上)-, 彰国社, pp.120-128, 1986.04

[3] 片木篤:『建築文化』-各論 I まやかしの城ラブホテル論(下)-, 彰国社, pp.111-120, 1986.05

#### 7. 図の出典

[1] <https://trvbook.com/hotel-domestic/item-750155/> (2023/10/02)

[2] <https://happyhotel.jp/hotels/540549> (2023/10/02)

[3] <https://couples.jp/hotel-details/1640> (2023/10/02)